

## 第二十五回ことばの祭典―短歌・俳句・川柳へのいざない― 入賞作品

【事前応募】 題 「野」もしくは「触れる」

### 《短歌の部》

ことばの祭典賞

十六の唇触れるリコーダー音楽室に海が鳴るまで 花月大師（東京都板橋区）

〔講評〕リコーダーの音色に海鳴りの音を連想する感性がみずみずしい。奏者が十六歳であればなおのこと。十六人による合奏ともとれるが、十六歳という悩ましくも美しい人生の季節とリコーダーの響き合いが海を呼び出しているのだ。（三枝）

吹き込まれた息が音となり、重なり合い混じり合い広がってゆく。それは潮騒。それは海。十六の唇によって、海が音楽室に現れた。この世のすべては「触れる」ことから始まるのかもしれない。みずみずしい原初性を感じる。（梶原）

### 三枝浩樹選

特選

水平の間に触れて離れゆく太陽と海永遠の絡線 関芽里（東京都江戸川区）

〔講評〕水平線から昇る太陽。刻々と変貌しつつ離れてゆくその一瞬の神秘的な光景が描出された。「永遠の絡線」とわからく、なるほど。

秀逸

告げられし余命を過ぎて空色のいぬふぐり咲く春の野に立つ 小野寺寿子（仙台市青葉区）

〔講評〕宣告された余命を超えて在る命といぬふぐりの咲く春の野。「空色の」という色彩への感応も一期一会のように眩しい。

きみのこころ、そのまんなかにふれたくてわたしは手紙の言葉になった 工藤美咲（秋田県能代市）

〔講評〕手紙にしたためる言葉は話し言葉と違って伝達よりも心の告白。表層ではなく心の真ん中に届けたい。その心。

佳作

早朝のバスの座席におさまって野いばらの実のようなさみしさ 吉川ちひろ（神奈川県相模原市）

〔講評〕初句が夕方ではなく「早朝」であるのが新鮮に感じられる。野いばらの実のような、朝のかなしみとさみしさ。

夏袴捌き端座の若き棋士一礼をして駒に触れたり 熊本芳郎（山口県周南市）

〔講評〕対局に臨む藤井聡太棋士の姿とその所作があざやかに描かれている。要所を押さえた上の句の印象描写も見事。

五月とは夏にも見える色をして手すりに触ればひやりと冷たい

小宮瑠華（仙台市青葉区・高校二年）

〔講評〕清新で美しくも楽しくもある五月。そこに潜んでいる「ひやりと冷たい」感触。青春論のような味わいがある。

すつぴんの野原がいいと言う地球コンクリートはちと厚化粧 安藤敏彦(福島県郡山市)

〔講評〕 無機質なコンクリートに象徴される人間の傲慢さ。地球にとつては迷惑な闖入者なのではと語りかけてくる歌。

触れた手のぬくもり刻む夕間暮れ白いつつじが今日の観客

碓石一葵(仙台市青葉区・中等教育学校五年)

〔講評〕 逢引きの場面ともとれるが、一人になつてきみの温もりを思っている場面と読んだ。下句の視点移動、面白い。

梶原さい子選

特選

告げられし余命を過ぎて空色のいぬふぐり咲く春の野に立つ 小野寺寿子(仙台市青葉区)

〔講評〕 本来ならば見ることのなかった風景の中にいる。冬ののちの春の野に。「野」のパワーを感じられる歌。

秀逸

木漏れ陽に触れては戻るハンモック単行本の頁揺らめく 中野弘樹(埼玉県春日部市)

〔講評〕 ゆるやかな樹下のひとときの雰囲気がよく表れている。「木漏れ陽に触れて」のかそけさがとても魅力的。

夏袴捌き端座の若き棋士一札をして駒に触れたり 熊本芳郎(山口県周南市)

〔講評〕 対局が始まる、その瞬間を捉えて秀逸。若き棋士の所作の美しさが、丁寧な描写によつて生き生きと立ち上がる。

佳作

車椅子のタイヤが野原の凹凸を手に背に伝え教えてくれる 中原伸二(山口県光市)

〔講評〕 車椅子に乗っているからこそわかる「野原」がある。「教えてくれる」という擬人法に、車椅子への思いが見えた。

汚染水タンクに触れて上り来て春満月のぼつてり浮かぶ 齋藤伸光(仙台市青葉区)

〔講評〕 タンクに触れたゆえの「ぼつてり」だろうか。従来の「春満月」の美しい読みのコードを、疑わせる歌。

願わくば君に容易く触れている雨になりたい窓越しの午後 吉田和菜(宮城県気仙沼市・高校三年)

〔講評〕 確かに、雨ならば、堂々と遠慮無しに触れられる。でも、まだ「窓越し」の君と私。突拍子もない願いを生んだ恋心がせつない。

森の中お水にふれてふくぬれてきがえわすれてはつばのふくきて

佐藤涼音(仙台市太白区・小学二年)

〔講評〕 おしまいの「はつばのふくきて」にびっくりしました。これはいいなあ。どんなにぬれても大じょうぶですね。

テキサスの野犬でありしデージーよ今みちのくの薫風をゆく 中村春(仙台市青葉区)

〔講評〕 「薫風」と「デージー」の取り合わせがすてき。デージー、テキサスの風とみちのくの風は、どんなふうに違いますか？

《俳句の部》

ことばの祭典賞

何をするわけでもなくて春野かな 山本啓（奈良県葛城市）

〔講評〕春野への作者の体感が簡潔に表現されている。（柿本）

自然体のゆつたりとした表現に春野らしさとそこを訪れた作者の春への思いが豊かに  
湛えられている。（高野）

柿本多映選

特選

銃を捨てよ野に一輪のヒマワリを 菊田郁朗（宮城県登米市）

〔講評〕戦争は絶対駄目。言語感覚が抜群。

秀逸

くちびるに新色を刷き春マスク 高田三江子（静岡県静岡市）

〔講評〕ささやかだが、抵抗と皮肉とユーモアがある。

野辺に咲くことを夢見る水中花 石川昇（東京都世田谷区）

〔講評〕水中花に対する作者の眼差しが感じられる。

佳作

心野に放てば遠き花の山 深谷徹（仙台市青葉区）

〔講評〕作者の心の風景が鮮明。

足跡を遺すすべ無き夏野かな 佐々木清志（岩手県北上市）

〔講評〕夏野の景を際立たせている。

野の花のひとつ加ははる石地蔵 嶋良二（愛知県日進市）

〔講評〕細やかな風景。人の心の温かさ。

春告鳥調子外れが野に響く 高橋基（千葉県柏市）

〔講評〕新春の鳥の鳴き声。鳥を温かい目で見ている。

春風や野球少年盗塁す 小田中準一（千葉県市川市）

〔講評〕この少年の全体像が見えてくる。

高野ムツ才選

特選

足跡を遺すすべ無き夏野かな 佐々木清志（岩手県北上市）

〔講評〕夏野の生命力、自然の力の強さ、そして人間の力の小ささが表現されている。

秀逸

野につらら岬につらら戦死報 千葉信子（千葉県千葉市）

〔講評〕野の草つらら、岬の崖つらら、どれも戦死者の報が伝わるたび悲しみにうなだれて太る。  
ウクライナの戦争の悲しみであろう。

夢が覚め一番に触れる春の風 内藤愛里（宮城県亶理郡亶理町・高校二年）

〔講評〕雲に乗ったような安らかで気分の良い夢を見た。目覚めてすぐ触れたのも夢の中に吹い  
ていたと同じ春風だった。

佳作

野辺に咲くことを夢見る水中花 石川昇（東京都世田谷区）

〔講評〕 コップから自力で出ることができない水中花の悲しみと願望が伝わる。

青野ゆく盲腸線の一輛車 白鳥光代（宮城県富谷市）

〔講評〕 終点が行き止まりの短い区間を走る電車。しかし、大切な住民の足。今日も夏野を懸命に走る。

野に放つ牛馬息子若葉風 高田留美（京都府京都市）

〔講評〕 伸び伸び放牧された牛や馬。自分の子供も同じように草原で自由を満喫させる。若葉風が涼やか。

裾野より鏡仕上げの大代田 木村一枝（宮城県大崎市）

〔講評〕 一夜にして生まれたような広い平野の広い代田。「鏡仕上げ」という表現が効果的。

花のなき野草はあらしみどりの日 佐藤尚（仙台市青葉区）

〔講評〕 ストレートな表現だが、力強い自然讃歌。

《川柳の部》  
ことばの祭典賞

先日発表した《川柳の部》ことばの祭典賞の作品について、類似作があるのご指摘をいただきました。選者の先生とご相談の結果、受賞を取り消し、該当作なしとします。

新家完司選

特選

完走の後は花野で眠りたい 深谷京子（仙台市青葉区）

〔講評〕もちろん、この「完走」は人生という長距離ランニング。精一杯がんばってゴールした後には心充たして安らかに眠りつくのだ。

秀逸

野仏のいわれを語る者が不在 徳永逸夫（高知県須崎市）

〔講評〕どのような経緯でどなたが建てられたのか、知る人もいない地藏さま。そのようなことには頓着せず、やさしく微笑んでおられる。

花びらが野点の端に来て座る 阿部文彦（神奈川県横須賀市）

〔講評〕厳しい冬も去って、ようやく満開になった桜の下での野点。舞い降りた花びらが墓の端にちょこんと座って見守ってくれている。

佳作

たましいに触れることばを待っている 安藤敏彦（福島県郡山市）

〔講評〕作りごとや飾った言葉ではなく、真実の想いを込めた言葉は必ず相手のハートに届く。それを模索するのが「文芸」だろう。

古里の扉開けると野のにおい 加藤鈴枝（仙台市青葉区）

〔講評〕ともだちと駆け回っていた野原や畦道の匂い。久しぶりに故郷の駅に降り立つと、真っ先にその懐かしい匂いが出迎えてくれる。

野あざみに五月の鬱を笑われる 太田良喜（宮城県柴田郡大河原町）

〔講評〕新しい環境に馴染めず鬱々とする「五月病」。気分転換に野原へ出てみると。野あざみに抱きしめて育てた指が忘れない 「もつと余裕を持って！」と笑われた。

抱きしめて育てた指が忘れない 中川潔（福井県福井市）

〔講評〕半日も触れない日はなく、大事に慈しみ育てた我が子。その温もりや柔らかな感触は両手の指がしっかり覚えていてる。

野放しじゃないよ悠々自適だよ 山内則子（宮城県宮城郡利府町）

〔講評〕傍若無人にやっているのではない。良識をわきまえた上で、他人に迷惑をかけぬよう悠々と楽しんでいるのだ。

栗石隆子選

特選

どこに触れても感電しそう地球 森山盛桜（鳥取県鳥取市）

〔講評〕 7・7・3のこれも定型の範疇。ピリピリしている地球の今を言い得ている。川柳は今を詠む文芸であり懐古することより、生きている今を感懐する。オリジナリティー溢れる緊迫感を買いたい。

秀逸

野に咲く花そこがわたしの着地点 前田楓花（鳥取県鳥取市）

〔講評〕 大地は人間が生活するための宝庫、と言われている。流転の時があっても、帰りつくのは野花の咲くところ。

たましいに触れることばを待っている 安藤敏彦（福島県郡山市）

〔講評〕 ひとたび発せられた言葉は永久に残る、と語ったトルストイ。琴線を揺する言葉は、人を包み啓発するだろう。

佳作

人生は一筆書きの荒野かな 今北渚（兵庫県宝塚市）

〔講評〕 人生は一度きり。時として渋滞することがあっても、一筆書きのごとくである。下五の措辞の「荒野」に強かさを思う。

妖怪の舌が触れてる核ボタン 渡辺徹（仙台市青葉区）

〔講評〕 妖怪、と言うだけもの。最終兵器である核爆弾をチラつかせている。核ボタンを舐めまわして、地球滅亡を脅している。

守りたきものに野の花空の青 岡田とみ子（宮城県宮城郡松島町）

〔講評〕 野の花もふみにじられ、空には弾丸が飛び交う。こんなことが日常になっているウクライナ。今や日常の大切さを知る。

貫いているのか尖っている野獣 志賀ひろこ（仙台市青葉区）

〔講評〕 野獣、人非人だろうか野獣をモチーフにした作品。ドラマチックで既視感のない作品である。この果てを知りたい。

バラライカ野戦の月を眠らせよ 加藤ゆみ子（神奈川県横須賀市）

〔講評〕 三本弦のバラライカと野戦の月。比喩的に月は女性を表すが、句意は語り難い。眠る暇のない月へのエールであろう。

《短歌の部》

氷点下広い野原は雪化粧キリトリ線を人がつけて行く 米倉瞳（東京都大田区・高校三年）

〔講評〕 昨年、仙台文学館で催した星野道夫展で目にしたアラスカやシベリアの大氷原。そこを行く人が付けていく足跡を目にしているような、視覚的なイメージが鮮やかでした。

《俳句の部》

独り身の若葉に触れることもの日 島山耕賑（宮城県大崎市・高校二年）

〔講評〕 季重なりがあり、こともの日を過ぐす独り身の人間の心中を素直に詠んだ句かもしれない。「独り身」も、「若葉」も、イチヨウのように雌雄異株で、その一本だけでは実を付けない。「独り身」樹木のものだととらえると興趣が増します。文学に必要な他者への想像力を、若葉にも向けた、とも。

《川柳の部》

頬杖をついて野菜をつつく父 佐藤安純（宮城県大崎市・高校三年）

〔講評〕 「ついで」「つつく」という音の重なりがリズムを生んでおり、情景が浮かんでくるようです。父は野菜嫌いなのでしょうか、それともコロナ禍や戦争などの心配事で、食事中にも気もそぞろ、といった状態なのでしょうか。溜め息まで聞こえてきそうです。